

2019年9月2日(月)第16号(第2版)

共同研究推進委員会通信

発行：教育学部共同研究推進委員会/共同研究推進委員長

みとりを意識した授業研究会が教科を超える

2019年度附属中学校と学部の共同研究は道徳で4月5日上地先生、性教育で4月26日村末先生、特別支援で5月24日城間先生、から学ぶ研修から始まった。それは附属中において課題である「価値の押し付けでなく考える道徳」の創造や、特別な支援や性教育のあり方に向き合う時、附属中と一緒に考えていただいた学部の先生方の知見を転勤してきた先生を含めて教員全体で共有する為の研修会であった。

そして5月27日、教育学部共同研究推進委員会附属中学校推進委員の第一回目の集まりを開いた。附属学校が共同研究を委嘱するという形をやめ、共同研究は大学の任務であるという前提であるという大城委員長のご挨拶から始まった。そして研究主任中村謙太先生が附属中の研究のあり様を共有した。

ここに至るまで、附属教員と学部の教員の溝を埋めるのは難しく困難であった。主体的に研究したい附属教員、指導助言を求められる学部教員という固定した状況を変える学部の努力が今始まったのである。

附属中学校との共同研究を担う学部の教員は次の方々である(敬称略)。国語-武藤清吾・萩野 敦子・村上呂里、社会-白尾裕志・里井洋一、数学-日熊 隆則、理科-岩切 宏友・齊藤 由紀子 音楽-小川

由美、美術-Spree.Titus・仲間 伸恵、保健体育-増澤 拓也・砂川 力也、学校保健-宮城 政也、技術-清水 洋一・福田英昭、家庭-田原美和・土屋 善和、英語-大城 賢・深澤 真、道徳-上地完治、コーディネーター・総論-上江洲・里井、

理論的な枠組みでは、現在の「主体的対話的深い学び」に結びつく研究を前世紀末から両附属学校は実践された。先駆的であるがゆえに、公立学校が実践するには大きな壁がある状況でもあった。しかし、新指導要領の実施を間近に、その蓄積された附属学校の研究が必要とされる時期になった。

このような中で、附属中学校は2019年、11月3日の第32回教育研究発表会のサブテーマを長時間議論し熟成させて「一人ひとりの学びのみとりを通して」と決定した。教科を越えて一人ひとりの学びをみとることは、子どもを多面的に理解し、安心感を醸成する事を見出した。教科間の壁が沖縄の公立中学校の課題になっている中、教科を越えた研修のあり方をどう公立中学校に広げるかが附属中研究の課題となっている。

5月末から7月初旬にかけての公開授業には、二人以上の学部教員が参加し議論のもっている意味を読み解く学部教員の姿があったことを記し、感謝申し上げる。

(文責：附属中研究コーディネーター 里井洋一)